

モンブランケーキを食べたい！目標実現を目指した訪問 ST の取り組み

症例

70 代女性、3 年前にパーキンソン病を発症、3 食経口摂取であったが、今回、摂取量が低下し胃瘻を造設。急性肺炎を発症し当院へ入院となった。

入院時初回評価

意識清明だが熱発による倦怠感認められた。口腔・舌の運動範囲に低下なし。MPT は 2 秒で発話明瞭度は 3.5 であった。RSST1 回で喉頭挙上に筋力低下を認められた。

経過

嚥下機能に重度の低下を認められたが、嚥下訓練の結果、完全側臥位でゼリーを用いた直接嚥下訓練が可能に。しかし、入院中に目標の実現は出来なかった。施設では、重度嚥下障害者への食事介助に不安が根強い状況であった。そこで、1 週目に集中的に介入し、職員へ嚥下能力の伝達や食事介助方法を指導し、週 4 回の経口摂取機会を確保した。以降は週 1 回訪問し定期的な嚥下評価と職員への指導を継続し、病院での嚥下リハビリを生活期でも継続する様に取り組んだ。結果、入所から 4 ヶ月後に当院嚥下外来の VF 検査にて、30 度リクライニング姿勢での全粥、刻みトロミ食が可能となり、目標のケーキ摂食が実現した。

考察

嚥下リハビリの質を継続していくには施設での摂食機会を整備する必要があった。そこで、退院後の嚥下外来や職員へ経口摂取に関する啓発活動を中心にバックアップ体制を構築した。結果、切れ目のないリハビリ提供が可能となり本人の希望が実現した。このことから、入院期間で嚥下リハビリが完結しない症例においても、生活期で目標実現が可能であることが示唆された。